

ホノルル教育會編纂

副日本語讀本

六

もくじ

一	獅子と蚊	.....	一
二	東郷大將	.....	三
	(一)	.....	三
	(二)	.....	九
三	愛の音楽	.....	十三
四	海	.....	二十
五	周吉と小犬	.....	二十二
	(一)	.....	二十四
	(二)	.....	二十六
	(三)	.....	二十八
	(四)	.....	三十
	(五)	.....	三十一

六	時計のない村	.....	三十三
	(六)	.....	三十三
	(七)	.....	三十五
七	詩三篇	.....	三十七
	(一) 犬と雲	.....	五十
	(二) 夕顔	.....	五十一
	(三) ほうじろ	.....	五十三
八	正直	.....	五十五
九	頓智	.....	五十七
十	天の祭壇	.....	六十
十一	松山鏡	.....	六十二
十二	太郎の家のお話會	.....	八十

もくじ

十三	權兵衛の種蒔	百九
十四	偉い王様	百十三
十五	圓山應舉	百十五
十六	蛙の學校	百二十二
十七	日本見物	百二十四
十八	地獄めぐり	
	(一)	百三十四
	(二)	百三十七
十九	ローレイの少女	百四十
二十	血染の財布	百四十六
二十一	七福神	
	(一)	百五十八
	(二)	百六十二
	(三)	百六十五

二十二	メレー婆さんとそのかい犬	
	第一場 うらだなずまい	百七十五
	第二場 肉屋	百八十三
	第三場 仕立屋	百八十五
	第四場 靴屋	百八十七
	第五場 もとの婆さんの家	百八十八
二十三	くもの糸	
	(一)	百九十四
	(二)	百九十七
	(三)	二百三
	もくじ おわり	

副讀六

副讀六

### 一 獅子と蚊

獅子<sup>しし</sup>がやわらかな草の上に、さも愉快<sup>ゆかい</sup>そうに居眠<sup>いねみ</sup>りをしていました。すると草の中から一匹の蚊<sup>か</sup>がブーンと羽音<sup>はねおと</sup>をたてて獅子のそばへ飛んで参<sup>まゐ</sup>りました。

「おい獅子君、君は獸<sup>けだもの</sup>の王だなんてえらそうな顔をして、何時<sup>いつ</sup>も威張<sup>いば</sup>っているが、どうだ、おれと一つ喧嘩<sup>けんか</sup>をしてみないか。他の獸なら知らぬこと、小さいながらもこのおれは、どうしてく君たちなんぞに負けるものではない。」

といふました。獅子は心地よく眠っているのに、うるさくてたまりませんから、

ように沈んでしましますと、悲しそうな顔をなさりながら、又ぶら／＼とお歩きになり始めました。

自分ばかりじごくから抜け出そうとするカンダタの無慈悲な心が、それ相當な罰を受けて、またもとのじごくへ落ちてしまいました。しかしじごくらくの蓮池の蓮は、少しもそんなことはかまいません。その玉のような白い花は、お釋迦様のおみ足のまわりにゆらゆらとうてなを動かしております。其のたんびに、まん中にある金色のずいからは、何とも言えない好い香が絶間なくあたりに溢れ出ます。じごくらくももうお晝に近くなりました。

終

副讀六

昭和五年四月十二日印刷  
昭和五年四月十五日發行



Made in Japan

編纂者  
發行者

ホノルル教育會

東京市京橋區銀座西七丁目一番地

株式會社 帝國地方行政學會

印刷者

電話銀座六六〇・六六一・六六二・六六三番

振替貯金口座東京一三・一六一番